

## 平生鈺三郎と甲南学園の成立（下）

砂原 教男

### Hachisaburo Hirao and Foundation of Konan educational Institution(2)

—Difficulties of foundation of the old style higher school—

Norio SUNAHARA

美濃國加納藩士田中時言の三男として、加納三丁目に生まれた平生鈺三郎は、明治十一年、地元の憲章小学校を卒業、岐阜中学校に入学した。成績は優秀だったが、学資に窮し、退学し、横浜外国商館のボーイを目指して上京したが、官費生として東京外国語学校露語科に二十倍の難関を突破して入学した。

東京外国語学校は仏、独、露、漢、朝鮮の五語を教授していた。平生の「自伝」によれば『学生は弊衣粗服の貧書生多数にして、多くは士族の子弟にして、平民籍のものは百人中二三にすぎず』という状況であった。しかし、露語学生には、第二次大戦中に男装の麗人として有名になった川島芳子の養父川島浪速や後には作家・翻訳家として活躍する二葉亭四迷などがいた。

ところが、右大臣岩倉具視の死去後、伊藤博文によって太政官制度が廃止され、内閣制度が樹立され、行政府が確立したが、この変革に伴い政府の各方面に大変化が行われた。

平生が通っていた外国語学校も明治十八年に廃止されることになり、官吏の子弟が多かった仏・独科は大学予備門に併合され、旧制高校への道を歩むことになったのに、平生が通っていた露・漢・朝鮮語科は廃止され、外国語学校の校舎は東京商業学校（明治八年創立の商法講習所が明治十七年農商務省の直轄になり、このように改称された）に移され、外国語学校は東京商業学校の附属語学部とされた。教室は東京商業学校のものとされ、外国語学校の教室は従来の寄宿舎の自習室に移され、自習室は階上の寝室に移された。

この事態を平生は「日記」に『我々は、五カ年の過程を已に四カ年を終了し、今、一カ年に於いて卒業せんとする今日に於いて、廃校の悲運に遭ふ。一同の悲運名状すべからざるものありといへども、如何とも策のほどこすものもなく切歯して時局の発展をまつのみなりし』と政府の非道ぶりを嘆いている。

明治十九年一月十九日には『夏ならざるに青天の霹靂ともいふべき驚天動地の宣言に接したり』と述べているが、室内運動場に集められた露、漢、朝鮮語の学生に、『政府の命に依り、本日かぎり語学部を廃止することになりたれば、諸君はもはや本校の学籍から除斥せられたるものなれば、本日中に退去すべき筈なるが、明日は孝明天皇祭にて休校なれば、今日明日中に

引き取る事を許可する』の宣言が発せられた。

なんとも無茶な措置である。現在ならば考えることも出来ない乱暴な決め方である。かくして、平生は独・仏科ならば、東京大学へのコースにのれたのに、露語科なるが故に、それから無情にも排除され、学校そのものを潰され、明日からの勉学の機会を鎖されてしまったのである。

このことが平生の人生にとって凶でなかったわけだが、その彼が、三十七年後になって、自分の作った学園卒業生達が、彼が或いは入れたかも知らない大学（＝帝国大学）への特別コースを作り上げたのである。全人格教育を目指す大学をひたすら目指していた平生は国家の有為な人材養成という国家の目標に巧く乗ったのである。

### 帝国大学への道

十五世紀のヨーロッパは、地理上の諸発見といわれる新航路の開拓、新天地の発見という機運が高まり、国内統一をいち早く達成したイベリア半島のポルトガル、スペイン両国は、東洋に向って乗り出していった。

その動きの一つが、当時世界有数の銀産出国日本への到達でもあった。しかし幕藩体制が整備されていた島国日本は、将軍絶対性を揺るがさない範囲でのヨーロッパとの修好を認めていた。当時のヨーロッパで宗教改革の結果としてプロテスタントの信仰を認めていたオランダは、ポルトガル、スペインとは異なり、宣教師を伴わない通商活動を実践できた国であった。

長崎出島での通商活動は、完全には言わないが、ほぼ日蘭間の通商活動に終始していた。

かくて医学、天文、自然、機械などキリスト教と関係ない様な知識が出島にもたらされた。これをうけて、幕府にはいくつかの新しい知識を扱う組織が作られていた。これを明治維新の頃の名前であげておくと、医学所（種痘所－西洋医学所）、開成所（幕府天文方－蛮書和解御用－洋学所－蕃書調所）のふたつがある。

これらのものは維新の際に一切ご破算になるが、余人では代え難かったからか、旧開成所総奉行川勝近江、旧頭取柳川春三は維新後もそのまま開成学校頭取となっているし、医学校では旧医学校頭取の松本良順は佐幕派として会津に脱走したが、それ以外の坪井芳州、石井謙道、緒方惟準、司馬凌海は上級教授として維新後戻ってきている。

維新当初は、新政府内の公家勢力と結んで、儒教・漢学の旧昌平黉系は国学系をも昌平学校に取り込んで、国・儒・漢を核に新しい学校制度の中心に据えようとした。

この復古の動きに箕作麟詳、福沢諭吉、神田孝平、森有礼などは反対し、近代化・西欧化路線を推進しようとした。

明治二年七月の官制改革で昌平学校を中心に据えて、皇学派の意を迎えて、大宝令に出てくる大学寮から考えられた「大学校」と称し、この下に、開成所や医学校は附属的な位置におか

れた。江戸時代にバラバラに成立してきた諸学校は一つのシステムにまとめられた。この大学校は同年十二月には「大学」とされ、開成学校は大学南校、医学校を大学東校と改称された。

明治三年には洋学派と皇漢学の大学本校との対立は洋学派の勝利に終わり、大学本校は閉鎖され、明治四年七月の文部省の設置にともない大学は廃止され、大学南校、大学東校はそれぞれ東校、南校と改称された。

東校は西洋医学の医師養成の機関であるのに対し、南校は西洋の学問をするために最も基礎的な語学を教える語学校といっても、英語での読み書きから、数学、物理、世界史などの普通学を外国人から教授されていた。

日本最初の近代的学校制度に関する教育法規たる「学制」発布後、明治六年四月南校を第一大学区第一番中学校として開成学校に改組し、従来の普通学、語学を教授する学校を東京外国語学校として独立させた。翌年この東京外国語学校から東京英語学校が分かれ、これが東京大学予備門になり、さらに第一高等中学校を経て第一高等学校となり旧制高校になって行く。

明治初年では英語による普通学を教授する語学校であったものが明治七年頃には専門学校レベルの東京開成学校、東京医学校になり、明治十年四月には両者は併せて東京大学となっているが、この数ヶ月前には工部省の設けていた工部寮は工部大学校と改められているが、東京大学との合併はもう少しさきであった。

明治十二年の学位制度が制定され、東京大学だけでなく、前記の工部省工部大学校以外にも司法省法学校、農商務省駒場学校、北海道開拓使札幌農学校も学位付与機関になった。しかし、明治十八年には司法省法学校は東京大学法学部に、工部大学校は工科大学として東京大学に包摂されていった。

## 帝国大学

明治九年の『東京開成学校一覧』にはImperial University of Tokioとなっているそうである。このImperialを帝国と訳すのはおかしい。多分、『国立』という位の意味だろう。しかし明治十九年、時の文部大臣森有礼は「国家の須要ニ応ズル學術技芸ヲ教授シ及ビ其ノ蘊奥ヲ攻究スルヲ以テ目的トスル」の第一條であまりにも有名な帝国大学令を公布して東京大学を帝国大学と改めた。帝国大学は井上毅、西園寺公望らの努力で第二の帝国大学が明治三十年京都にもうけられると東京帝国大学と名称を変えた。以後明治四十年には東北、明治四十四年には九州、大正七年には北海道と徐々に帝国大学が創立され、敗戦の時までに国内に七、朝鮮と台湾に一つづつの帝国大学が設けられていた。

国立の総合大学は第二次大戦までは帝国大学に限られていた。国立単科大学も徐々に増やされてきたが、帝国大学との格差は歴然としていた。

## 旧制高等学校

明治新政権が構想した学校制度はフランス方式であったと言われている。その可否は別にしてその制度は全国を八大学区に、一大学区を三十中学区に、一中学区は二百十小学区に整然と分け、各大学区に大学校、中学区に中学校、小学区に小学校をそれぞれ一校ずつもうけるといふ壮大な計画であった。計算すると中学校は二百五十六校、小学校は五万三千七百六十校になる。そんな国力は維新後の日本にはなかった。そこで重点を底辺に置き、小学校の義務化に重点を置いた。

最高学府は紆余曲折をへて、維新後十年経った明治十年四月に東京開成学校と東京医学校の二つを併せて東京大学と名乗る施設を作ったが、驚くべき事に、東京医学校からは、明治九年二十五名の卒業生を出しているが、東京開成学校からは一人の卒業生も出していなかった。その理由は学力不足のため退学する学生が多かったからだが、東京開成学校の最優秀生が海外に留学生として送り出されてしまったという事情もあったようである。鳩山和夫、小村寿太郎、穂積陳重、杉浦重剛など明治時代に活躍した人々は東京開成学校から抜けてしまった人々であった。

それでは明治初期の大学への入学生はどのように集められただろうか。明治三年に、大学南校に各藩から、その大小に応じて貢進生三百人余りが推薦させている。彼らは藩内の情実で選ばれたので、能力的には優れてはいなかったのだろう。あの小村寿太郎が仲間五人で相談して不良分子の追放を大学当局に願い出ている。

そんなこともあって、南校は一旦閉鎖されて学生を再審査して再出発している。この南校は第一大学区第一番中学校に改組して、専門に向かう授業を行うとの目的を明確にした学校を設け、一般教養の勉強を外国語（主として英語で）で学ばせる為の学校であった。同様の学校は、全国で七カ所に設けられた。四年制の英語学校であった。東京、大阪、仙台、新潟、名古屋、広島、長崎であったが、このうち本来の外国人教師による授業をやっていたのは東京の開成学校だけだったので、開成学校は明治十年開学した東京大学に吸収され東京大学予備門とされた。この東京大学予備門が一高の起源とされているが、制度的にしっかりとした旧制高等学校の成立はもう少し先であった。

## 高等中学校の成立

明治十八年、太政官制が廃止され、内閣制度がしかれ、初代文部大臣に就任したのが森有礼であった。森は翌年三月から四月にかけて帝国大学令、中等学校令、師範学校令、小学校令と近代的学校制度整備のための法令を次々に出した。

中等学校令では中学校は尋常中学校と高等中学校の二つに分けられ、尋常中学校は実業につかんとする者、高等中学校は大学に入学希望する者に必要な教育を与える所であった。北海道、沖縄を除く全国を五区に分ち一校ずつ国庫によって設置されるようになっていた。尚高等中学校には法科、文科、理科、農業、商業の分科を置くことになっていた。

東京は東京英語学校でほぼ決まっていたので、のこり四校の誘致合戦がはじまった。十九年から二十年にかけて、仙台（第二）、京都（第三）金沢（第四）、熊本（第五）が決められた。中学校令第六條には『各府県ニ於テ便宜コレヲ設置スルコトヲ得ル』となっていたので、この六條に基づいて、明治十九年には山口が山口高等中学校を、翌二十年には鹿児島が鹿児島高等中学校造士館を作った。まさに薩摩・長州の維新を推し進めた雄藩が、藩の若者を是が非でも新政府に送り込まんが為に、毛利家や島津家を中心に金を出して作ったものであった。だから山口、鹿児島とも地元出身者を優先して合格させている。あの『貧乏物語』で有名になった京都帝国大学経済学部教授の河上肇は、この制度で無試験で山口高等学校に入学している。この特典も明治三十一年に高等学校の入学定員の公示、三十五年には高等学校の入試問題が全国同一問題による一斉入試に切り替わると、それまで入学者の平均五十％を占めていた山口県人の割合は急落し、十三％になり、入りやすさが災いして東京人がトップになった。こうなると山口県民は他県人の子弟のためになぜ山口高等学校の経費を負担するのかと不満を持ち、明治三十八年山口商業高等学校に改組されている。

就学年は六歳で四年制の小学校に入り、二年制の高等小学校、五年制尋常中学校、本科二年制の高等中学校、最後に帝国大学三年というのが標準で計十五年間二十二歳で帝国大学卒業となっているが、ここまで到達する人はあまりなかった。学力が足らなかった。だから高等中学校に予科課程三年、その前に補充課程二年を置いてもよろしいとなっていた。さすが第一高等中学校は明治二十年に三百四十四名の本科生がいたが、第二、第四、第五の各高校は零、第三高校はは十一名という状態であった。

だが、帝国大学に与えられた諸特権、高級官吏（奏任官）任用のための高等試験免除、東京高商卒業生の初任給が三井鉱業では四十円に対して帝大工科卒業生は五十円、慶応は三十円などと非常に有利であった。すると高等学校への受験生は年々急激に増えていった。統計によると明治時代の入学者数は余り変わらないが、志願者は明治四十一年頃から急激に増えて行っている。倍率で見ると明治二十八年には一・五倍程度だったのが、明治三十年代には二倍以上になり、明治三十四年には三倍に、明治三十九年には三・五倍と高等学校入試は難関になっていった。

文部省はこれに対して、明治三十四年までは各校がそれぞれ自分で入試を行う単独選抜であったが、以後は共通選抜に変えたり単独選抜にしたり、試験問題は共通だが選抜方法は各校で自由としたり、それなりに工夫しているが、根本的解決は高等学校を増やすしかなかった。

文部省は何回となく会議を設置して、高等教育の諸問題の解決策を模索したが、巧く行かな

かった。

大正六年十月に寺内内閣によって、文部省でなく内閣に直属された臨時教育会議が開かれ、大正八年にかけて議論され、官立高等学校十校、実業専門学校十七校、専門学校を二校の新設が決められた。これに基づき大正七年には大学令が發布され、翌八年より多くの官立大学（東京商科大学など）や、大阪府立医科大学などの公立大学の新設が行われた。それまで大学と称していながら専門学校であった慶応、早稲田などが正式の大学になったのも、この大学令によってである。

高等学校では、大正八年に新潟、松本、山口高等学校などの所謂地名校が設けられたが、これは松本高等学校と山口高等学校の「第九高等学校名獲得戦争」のあおりで、ナンバースクールは第八高等学校（名古屋）迄で、以後は地名が付けられるようになった。

翌年には水戸高等学校、山形高等学校、佐賀高等学校、弘前高等学校、松江高等学校、翌年には東京高等学校、大阪高等学校が設けられることになった、

これは第一次大戦によって年々数億円にのぼる巨利を得たので、大正七年の通常予算で四校、八年には三校と高等学校の新設が可能になった。残りの十校は、大正八年から十三年までの高等教育機関拡充計画によるもので、これには皇室からの御下賜金一千万円と政府借入公債三千四百四十五円で高等工業高校、外国語学校、薬学専門学校などの創設の一環として行われたものである。

この高等教育機関の増設に貴族院では、御下賜金を特別基金にせず拡充計画の経費に一括繰り入れ、十校の新設高校中一校も七年制高等学校にしなかったのは臨時教育会議の決議を尊重しないのではないかとの意見が出たので、総理大臣原敬は次のように言い訳をしている。財源が乏しく、七年制高等学校を新設すると、一校当たり百六十名しか収容できないが、三年制高等学校にすれば一校当たり二百名収容でき、入学難の解消にもなると釈明したが、貴族院の意向をくんで東京高等学校一校だけを七年制に変更し、大正十年に創設している。

## 七年制高等学校

臨時教育会議は明治三十年頃から論議されながらなかなか纏まらなかった高等教育の諸問題を幅広く取り上げ、第二次大戦に至るまでの日本の教育制度を確立させたという意味で、この会議を運営し一つの結論をもたらした岡田文相の功績はおおきかった。

会議は全部で九つの問題について、その改善方策を答申しているが、その中に男子高等普通教育があり、ここで従来の高等学校の大学予科から高等普通教育機関への転換を答申している。

大正七年十二月六日に公布された「高等学校令」では高等学校の性格は「男子ノ高等普通教育ヲ完成スルヲ以テ目的トシ」と、明確に大学予科の性格を否定し、高等普通教育機関の一つとなった。



この臨時教育会議で公立、私立の大学が認められたように、高校に関しても官立以外に、北海道および府県の公立高等学校、財団法人の形での私立高等学校の設立を認めた。但し私立に関しては設備資金以外に少なくとも五十万円（一学部ごとに十万円追加）の基本財産を規定している。

教育史を見ていて驚くが、法律・規則通りにものごとが進行していないことが多々ある。全国を五つの大学区に分けて、それぞれに大学を設置するときめてあるのに、現実には東京大学だけであったし、高等中学校は普通課程が中心だったが、附設の大学進学コースが中心になって、結局普通課程は消えてしまった。この高等学校も、尋常科四年、高等科三年計七年と明確に規定され、その後に三年の課程を置くことが出来るとあるので、高等学校は七年が本則であったと考えるべきだが、現実には官立の七年制高校は東京高等学校のみ（但し台湾総督府立台北高等学校、学習年限が尋常科が五年と一年長い宮内省管轄の学習院は「七年制」であった）、公立は富山高校と（東京）府立高校、（大阪）浪速高校だけで後の武蔵、甲南、成蹊、成城は私立であった。

この高等学校令では、前述の通り、三年制高校は六百人以上、七年制高校は高等科四百八十人以上、尋常科三百二十人以上と最高定員が定められた。このことは私立高等学校に非常な重荷になったようである。

## 甲南高等学校の成立

平生鈺三郎の日記（ワープロ版で百八十八冊になる！）には帝国大学が知識の切り売り、単なる資格の供給機関に墮していると批難し、理想的な大学を作りたいといくつかのところで述べているが、第一次大戦後の大不況で、彼の理想的大学待望論は陰を潜める。とても理想的な大学は造れないと考えたに違いない。

僕の手許には「平生日記」のワープロ版約二十冊がある。卒業生の何人かが甲南大学の先生方とともに、それぞれ数ヶ月分の日記を読み、その問題点や興味ある点、重要な点を発表し、論議することを行っている。その時そのときで事務局からコピーが送られてくるので、連続していないわけだが、その平生日記を見直して言えることは、第一次大戦後の大不況までは、平生は理想的な大学を作るんだと発言し、その為の準備もしている。校舎は大学になっても使えるような物を作ろうとしていた。久原も平生の考えに同調し、彼が管理をまかされていて、大学の図書館に寄付すると約束していた（大正八年四月二十七日、五月十日）西本願寺大谷光瑞が明治四十二年に建て、「山を楽しみ、育英を楽しみ」の言葉通り学校を経営したりしていた別邸『二樂荘』の址は、没落した久原の借金（大正十年四月二十一日－久原房之助は所有財産の総てを提供しても債務完済不能）の為に人手に渡ってしまった。

第一次大戦の空前の好景気は長く続かず、すでに大正九年三月には、東京証券取引所で大暴

落が起こり、大不況に突入した。御下賜金及び三千四百四十五万円の公債で賄おうとした官立学校拡張計画は大きく狂ってきた。そのためにとられたのが地方公共団体などへの寄付金強要であった。

所が私立の場合はそうはいかなかった。甲南は大正十年の武蔵高等学校の次に高等学校新設を申請している。

甲南の創立者平生鈺三郎は東京海上火災の専務取締役であったが、彼ひとりで甲南学園の運営を出来るはずがない。結局住吉村在住の仲間の寄付で賄わなければならなかった。そのなかで目立つ人は、久原房之助であった。平生の日記を読んでいると甲南学園の運営が逼迫してくると久原が援助の手をさしのべてきた。

だが大正九年三月の東京証券市場の大暴落、六月のアメリカの不況が重なると、古河商事、鈴木商店、伊藤忠商事、互光商会、久原商事と大打撃を受け、彼らは立ち直れないかと思われた。

大正八年二月九日の日記では、平生は久原と会い、「氏は華族制度の廃止、相続税の五割徴収を以て、国民が貴族及び資本階級に対する憎惡の念を緩和し、上下融和の道を開くべき最も簡要なる方便ならんと切言せらる。余は一代富限にして数千万円の資本家が、自ら進んでこの相続税五割説を主張せらるるを聞きて、久原氏が尋常成金にあらざるを嘆称せずんばあらず。この一言は他日甲南大学設立に際し、氏をして数百万金醸出せしめ得るの言質をえたるものとして、余は甲南大学の設立は益々有望なることを信ぜずんばあらず」としているが、この段階では、久原は数百万の金を出すことが出来た。所で、少なくとも大学令が出るまでは、総合大学は帝国大学のみで、東京帝国大学よりも前に出来ていた慶応も大学令までは専門学校令に基づく大学であった。専門学校ならば中学校卒業で入れるわけだから、甲南も専門学校令に基づく大学を作れば、既存の甲南中学校の上に作れるわけである。

所が臨時教育会議で高等専門教育の拡充の一環として、公・私立の大学を認めた。慶応、早稲田、明治、同志社などが大正九年に昇格を果たし、関西大学、立命館が明治十一年に昇格した。

これらの私立大学は当然高等学校課程を卒業した者を入学させるわけだが、当時の（所謂旧制）高等学校は専攻を選ばなければ、天下の帝国大学に行けたのだから、高等学校卒業生は私立大学には行かなかった。だから各大学は高校課程の予科を作った。

そこに四年の尋常科・三年の高等科からなる七年制高等学校が作られることになった。しかも私立も認められる事になった。

当然平生はこれに乗った。しかし「理想的な大学」のための七年制高校である。上記の大正八年二月九日の久原との会談の記述に

「氏は余が甲南中学校をして七年、中学即ち教育令に依れば高等学校たらしめ、人物本位の高等学校たらしめ。其主意をして教授方法を改善し教授科目を安排せしめんには校長及び教員は必ずこの主意を貫徹せんには、同一主義を以てする大學の設立を要求すべき事歴然たれば、我々は他日大学を設立して其の目的の貫徹を計るべき事を保証せざるべからずと」とある。



平生日記の全部を見ていないから確実なことは言えないが、高等学校の具体的な話が出てきたのは、これが最初だろうと思う。

平生は、まず高等学校を作って大学にしようと考えていたのではないだろうか。そもそも七年制高等学校の上の私立大学というものは可能だろうか。全部を調べていないが、慶応も早稲田も同志社も、大学令或いは高等学校令が出された後、旧制高等学校を作った所はないようである。旧制高等学校と私立大学とは全く並立できない存在ではなかったと思われる。平生は一体どんな姿を描いていたのだろうか。

いずれにしても平生は、第一次大戦後の空前の大不況下で、望みうる最良の選択をしたのではなかっただろうか。支援者が財を失い、平生が夢に描いた理想的な大学は画餅にきせんとしている事態にいたっていた。

大正八年五月三十一日に大阪倶楽部で中橋文部大臣の歓迎会が行われている。その席で中橋文相から『政府に於いては七年中学の試みには種々の困難ありて決行に躊躇しつつあり。依って私立学校に於て、其試験を為さんことを希望するものなれば、甲南中学校は必ずこの七年中学制度を実行せんことを希望する旨中橋氏より申出あり』との記述がある。第一高等学校以下の高等学校は七年制に移行するのに反対したので、新設の東京高等学校一校だけを七年制にしたと言われている。

中橋文相の申し出に対して、平生は『余は甲南中学は最初より七年制に則らんことの予定を以て計画せられたるものなることを説明し大いに満足を表せらる』と結んでいるが、難しい問題である。前述のとおり、私立大学と旧制高等学校は全く別の体系で、旧制高等学校の卒業生が私立大学に入学できるが、一体誰が入学したのだろうか。そのようなケースは希有の例ではないだろうか。それを平生は予定として計画していたとはどう考えるべきだろうか。

大正十年二月六日の日記に小森甲南中学校校長との協議で、新学期以降、甲南が七年制高等学校に進むべきかどうかを話し合ったなかで、教員も七年制高等学校の成否によって自己の進退を決めたいとしており、中学校三年生も高等学校にならないならば転校しようとしている状況だとの事情を聞いたあと『余は言下にこの解決は余も日夜苦心惨憺たるものありといへども、壹百万円の大資金を要する事件なれば現在の経済界においては容易に期待すべからず』と苦衷をのべ、最後に『隠忍して時機を待たん。否時機を促進するに力めんか必ず本校をして七年制の高等学校たらしめて以て最初の目的を達すべきを疑わざれば、時機の問題として忍ばるの外なからん』と述べたのに対して、『校長小森氏も同感の旨を述べらるる』と甲南中学校の卒業生が出るまでに、その進学先を設けざるを得ない事情を苦しげに述べている。住吉村の後援者達には平生の考える理想的な大学を作り上げる（そのためには高等学校課程も作らざるを得ない！）事は事実上不可能になってしまった。残された道は七年制高等学校しかなかった。

そして、大正十一年三月二十四日に『本日甲南中学校に於て理事会を開会す。甲南高等学校の設置に関する最終の会議』と述べられ、七年制高等学校を設立するようになったのである。

だが、創立の資金は大変で、『余は先日来生徒の父兄中に於て 高等学校の設置が経済界変調の結果、醸金者に於て其約を履む能わざる人々生じ、為に頓挫を來したるを惜むと共に、自己の子弟をして予期の如く高等学校に入学せしめんと希望を以て、父兄中の有志者を以て一種の維持会を組織し、一口掛金を一カ年壱千円とし、五カ年間継続的に醸金するの規定を以て已に壱万円の醸金者を得たり。而して最初の創立者中一時に予約の出資を為す能わざる人々より一年貳万円の維持金出資の申出あり』。本当に大変だが、『然るに高等学校を新設するとして初年に参万七千円、次年度に四万七千円、三年目に五万参千円の不足を生ずる都合なれば前途樂觀すべきにあらざるも、茲に別途金貳拾参万円（岩崎氏（三菱の）寄贈）あれば、之を以て不足を補充することとせば、五カ年間の維持は可能なる可く』と述べている。高等学校設立だけでもこのような状態であった。本当に危うい綱渡りのような状況であった。

そこで、五年間に『我々理事者に於て之に充当すべき基本金を募集、若くは醸出するの外なからんと動議を提出せしに一同異議なく、且余は右補充の爲め授業料八拾円を百円に引上げんことを提案せしも』結局否決され、『余は爲めに不足を生じたときは理事諸氏に於て考慮せらるべきを信じて（授業料値上げの）提案を撤介せり』

平生には七年制高等学校を作つて、甲南中学校卒業生を進学させて、この新しい高等学校を理想的な学校に作り上げて行くしか方法がなかった。

かくて甲南高等学校は大正十一年十一月十三日申請、翌十二年一月十六日認可、四月（七年制）甲南高等学校が高等科五十三名、尋常科六十名で開学された。最小の高等学校であった。

## 参考文献

- 1：平生日記全十七卷（第一巻のみ公刊）原則として片仮名は平仮名に直した。旧仮名使いはそのままとした
- 2：笈田知義：旧制高等学校の成立（ミネルヴァ書房）
- 3：笈田知義：旧制高等学校の展開（ミネルヴァ書房）
- 4：山住正巳：日本教育小史（岩波新書）
- 5：天野郁夫：大学の誕生（中公新書）
- 6：秦郁彦：旧制高校物語（文春新書）
- 7：平生鈺三郎自伝（安西敏三校訂）名古屋大学出版部
- 8：平生鈺三郎 一人と思想Ⅰ（甲南学園）
- 9：平生鈺三郎 一人と思想Ⅱ（甲南学園）